わたしの聖戦 ジ・ハード

◎◎女性が働くということ◎◎ 96

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

絵本と私

おとなになると、絵本というジャンルからはすっかり遠ざかる、ある一部の人を除いて…。ある一部の人とは、小さな子どもがいたり保育を職業としていたり、絵本の作家だったり挿絵を描く人だったり、つまり絵本と日常的に接する機会のある人のこと。その他の大多数は、特に男性は絵本に触れる機会はあまりないといっていい。

しかし、考えてみれば、ほとんどの絵本はおとなが作っているので、おとなの視点で物事を観ていることが前提だ。絵本は子ども向けだといわれながら、実のところおとながおとなのために描いているものではないだろうか。

「くまとやまねこ」という絵本が手元にある。湯本香樹実が文を書き、絵は酒井駒子、となっている。ご多分にもれず、ほとんど絵本のことを知らない私の本棚にあるこの絵本。

内容はいたってシンプル。仲良しだった小鳥を亡くしたくまが、すっかり気落ちしてしまい誰とも顔を合わさない鬱々とした日々を送る。死んでしまった小鳥をキレイな木箱に入れ、花を手向けるくま。でも周りから「小鳥はもうかえってこないんだ。つらいだろうけどわすれなくちゃ」と言われ、すっかり人嫌いになってしまう。ある日、天気の良いのに誘われて外へ出たくまはやまねこと出会う。

やまねこは、眠るようにして木箱に横たわる小鳥を見て静かに言う。

「きみは、このことりとの出会いや楽しかった思い出がくまの頭の中にどんどん出てくる。これまで封印してきたたくさんの事柄が次々と脳裏に浮かぶくま。くまは思い出の場所に小鳥を埋め、その後やまねこと旅に出る。やがてふたりは「くまとやまねこ音楽団」と呼ばれるようになる。

こんなあらすじのお話である。絵本に疎い私には、この絵本がどんな評価を得ているのか知識がない。作家もはじめて目にする名前だ。しかしこれは、明らかに愛する人を失った者の再生の物語である。

小鳥の死はくまをうちのめす。その死を受け入れられなくて木箱に入れて持ち歩く。周囲からは忘れろといわれるが、かえって内にこもってしまう。時間が経った後のやまねことの出会い。そして甦る小鳥との思い出。ようやく小鳥の死を受け入れることができ、新しい一歩を踏み出すくま。

親しい人の死を拒否するところから始まって最後には再び生きようと決心する。これは私達の日常にある出来事だ。忘れることはできないが、残された者は生きていかねばならない。なぜこの本が本棚にあったかを思い出す。私自身、昨年恋人を喪った。そのとき友人のひとりが差し出してくれたのがこの絵本だったのだ。当時より時間が経った今のほうがより胸にしみる。おとなのため、いや、これは私のための絵本だったことに今気づき、昨年とはまた違う涙を流した。

イラスト・三浦義雄